

■ 当面のドルは買われ難く、また売られ難い!?

既知のとおり、米政府は先週16日に経済活動の再開に向けた3段階のガイドライン（指針）を公表し、行動制限を一部解除する方向へそろりと動き出し始めた。すでに、20日からテキサス州とバーモント州が経済活動の一部を再開しているほか、24日からはオハイオ州、ノースダコタ州、5月1日からはアイダホ州が活動再開に漕ぎつけるとトランプ大統領は述べている。

「州内の流行が下降局面に入った」との見解を示しているNY州知事のクオモ氏は、今週21日にホワイトハウスでトランプ氏と会談し、同州による感染検査能力を2倍に高めるため、連邦政府が必要器材などの調達を支援することで同氏の同意を取り付けたという。

実際にウイルス感染拡大の勢いを封じ込めた韓国の成功事例をもとに考えれば、このところの米国の取り組みは着実に実を結ぶものと期待される。

なお、米国以外ではドイツが段階的に都市封鎖の制限を緩める方針を打ち出しており、その取り組みからは十分な慎重さが感じられる。また、イタリアでもコンテ首相が段階的な緩和の意向を表明している。ただ、同国については、昨日（22日）発表されたウイルス感染者数が再び大幅に増加しており、首相の思い入れが空回りする可能性もないではない。

他方で、治療薬やワクチンの開発・治験・承認に向けた各国の取り組みについても其々に期待の持てる話題が増えてきている。まずは、先週あたりから米ギリアド・サイエンシズのコロナ治療薬候補である「レムデシベル」の治験結果が好調であると伝わっている。また、富士フィルム富山化学の「アビガン」についても、その有効性を示す症例がここにきて数多く報告されるようになってきた。

そして今、何より注目と言えるのはタカラバイオがアンジェスや大阪大学などと共同で開発しているコロナウイルスワクチンの話題である。日本経済新聞の取材に応えたタカラバイオの仲尾社長曰く「治験に必要な数百本の生産準備は完璧に整った」、「年内に20万人分を製造する体制を構築している」とのこと。実際に年内にも量産体制が整うならば、来年の東京五輪開催も現実味を帯びてくる。悲観ばかりしてはいけぬ。希望の光は幾つもある。

コロナ関連の話題が続いたが、目下の相場を左右するのはウイルス感染拡大の動向より他になく、あえて言えば原油価格動向も重要だが、これも一つにはコロナの及ぼす影響が大きい。

先に、NY原油先物価格が史上初のマイナスとなったことには少々驚かされもしたが、これは現下のパンデミック状況にあつてこそ生じた先物の限月交代（5月限から6月限）時のテクニカルな現象と捉えれば良いだろう。また、現実問題として新しい限月（6月限）の先物価格が1バレル＝20ドル以下などという状況が今後も続くならば、さすがにサウジアラビアも黙ってはいられなくなると考えるのが普通であろう。

今週20日、21日の2日間でNYダウ平均は1200ドル以上下落したが、こうした原油価格急落に伴う急激な株安はあくまで一時的なものと考えられる。よって、基本的な流れはリスクオンであると見ていだろう。その場合、市場では円安が比較的進みやすくなるが、目下は米連邦準備理事会（FRB）による無制限の資金供給が行われているためドルが必要以上に買い上げられるわけでもない。もちろん、ドルが過剰に供給されてドル安になるわけでもない。

つまり、当面のドル/円はもみ合いが続きやすく、基本的には107.30-109.30円での価格推移が続くと考えていいものと思われる。目先を言えば、21日移動平均線と200日移動平均線が其々位置する108.00-30円処を上抜けるかどうか一つの焦点と見られる。

一方、ユーロ/ドルは前回更新分の本欄で述べたとおり、依然として「下降チャネル」を形成中であり、基本的に戻り売りで臨みたい方針に変わりはない。なお、目先は1.0800ドル処をクリアに下抜けるかどうか大きなポイントとなっており、とりあえず1.0800ドル処では試し買いを入れてみるというのも一手であろう。むろん、利益確定は小まめに行いたい。

（04月23日 10:30）